

---

# 願い・祈り

彩紅羅

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

願い・祈り

### 【Nコード】

N2063G

### 【作者名】

彩紅羅

### 【あらすじ】

あの日の自分を取り戻すために、真実を乗り越えるために、大切な人を守るために、あの日を繰り返さないように、それぞれの想いが交差して… 僕らは願う。僕らは祈る

## 1 登場人物

### 1 登場キャラ

渡瀬 陸（18）

紗輝山学園高等部。平凡。陸上では、かつて、100に一度の天才といわれた。怪我で引退。その後陸上部マネージャーになる。天然で、性格は良くて人気ある。3年S組。生徒会書記。

渡瀬 空（16）

紗輝山学園高等部1年A組。双子の兄。海が好き。美形で、成績は全国トップ。クール。

渡瀬 海（16）

紗輝山学園高等部1年S組。カッコワイイ美形。頭は悪いが陸上界ではかなり有名。空が好き。

神谷 晋（24）

ホストをしている。かつて、100メートル伝説のスプリンターとよばれた。怪我で走れなくなった。陸を復活させようとしている。

桜智 優夜（17）

陸の幼馴染み。一ノ瀬高校ね生徒会長。美形。陸が好き。陸上でも有名。

高内 美緒（17）

紗輝山学園高等部3年A組。生徒会メンバー。ちっさくて可愛い。陸が好き。

佐々木 翔（17）

紗輝山学園高等部3年。生徒会副会長。クール& amp; 美形。陸上部。

沖田 智輝（18）

紗輝山学園高等部3年A組。チャラチャラしてるっぽいけど、  
お生徒会長。学年主席。

三重 孝治(18)

紗輝山学園高等部3年S組陸上部キャプテン。背が高く男前。

大久保 利輝(16)

紗輝山学園高等部2年S組。生徒会メンバー。茶髪で、お調子者。  
バスケット部エース。学年主席。

本宮 雅(17)

紗輝山学園高等部2年A組。生徒会メンバー。和風美人。メガネが  
にあう。一つ一つの仕草が綺麗。

岩村 堅斗(17)

紗輝山学園高等部2年S組。生徒会メンバー。照れ屋だけどカッコ  
イイ。サッカー部エース。



## 1 登場人物（後書き）

2 回目の投稿です。彩紅羅です。文章力なくて、本当にすみません

m (—) m

これからもよろしくお願いいたします。

## 2 はじめに

### 2 はじめに

俺の名前は渡瀬陸。渡瀬家の長男だ。まずは、紗輝山学園について説明しよう。

俺が通う紗輝山学園は、中等部、高等部があり、俺は高等部3年Sクラブだ。クラスは、各学年5クラスで、A 特進科クラス B 一般（普通科）クラス C 専門科クラス D 専門科クラス S スポーツクラスとなっている。あとは、私立ででかい。レベルが高い。スポーツではかなりの有名。ってかんじだ。俺は、一応生徒会書記をしてる。

陸上部では、マネージャーをしている。もともとはスポーツ特進で入学したけど、高1の夏の夏の全国大会での200m×4継リレーで俺はレギュラーになり、決勝戦で怪我をした。チームは俺のせいで失格。あれから2年、スポーツ特進で入学したため部活を辞められない俺は、引退しマネージャーになっている。

俺には二人の弟がいる。二卵性の双子で、兄が空、頭がめっちゃよくて、特進クラスだ。弟が海<sup>かい</sup>短距離の天才で、スポーツクラスだ。今年入学する。俺は平凡なのに、この弟たちの顔のまあいいこと！おかしくないか？ってたまに思う。

それから、親友の桜智優夜。中学からの大親友で、陸上で有名な一ノ瀬高校に通ってて、生徒会長までしている。良き友であり、良きライバルだった。

俺は沢山の人に支えられてる。

この学園内で俺が怪我をして陸上を辞めたことを話すヤツは一人もいない。皆俺に気をつかっている。俺を攻めるヤツもいなかった。俺が天才と呼ばれていたから。俺の才能を奪ったって。俺にプレッシャーかけて、俺を潰したって、皆自分自身を責めてる。本当に悪い

のは、俺なのに。俺の心が弱かったからなのに…

## 2 はじめに(後書き)

次回からメインに入ります。新たなキャラも登場する予定です)\*  
^o^\*)

どうぞよろしくお願いいたしますm(\_)\_m

### 3 入学式(1)

#### 3 入学式

ピンポンパンポーン

「あと15分で入学式が始まります。校舎に残っている生徒の皆さんは急いで体育館に集合してください。」

今日は入学式だ。俺は生徒会だから、舞台の上に座る。今日は双子の弟、空と海が入学する。はずなのだが・・・

「会長！副会長！陸先輩！特進科の渡瀬空とスポーツ科の渡瀬海がまだきていません」

うちのばか双子はあと5分で入学式が始まるというのに、まだ来ないのだ…

「ハハハハッ」

「…？智輝、翔、何笑ってんの？」

生徒会長の沖田智輝と副会長の佐々木翔がお腹抱えて爆笑してる。

「だってさあ、俺らの入学式の時、陸、遅刻して校長先生の話の真ん中に駆け込んできたじゃん？なあ、翔？」

「ああ。先生たち、顔真つ青だったもんな」

「そーだっけか？覚えてない…」

「だろーな。あっ！入学式始まる。翔、陸行くぞ」

式は順調に進み、生徒会長からの話になった。

「入学生のみなさん、入学おめでとunggございます。わが高校で…」  
バンッ！

「遅れてすみません！はあはあ」

勢い良く2人の美形男子が駆け込んできた。女子がキヤアキヤアさわいでる。案の定、先生達はボー然としている。

あつ、ヤバイ。目があった！

その瞬間、

ガバツ

「陸にい！何で先に行っただよ〜（泣）起こしてくれればよかったのに〜」

突然身長が180センチ位ある男が、物凄い勢いで俺に向かって走ってきて、思いつきり抱きついてきた。

「…海、頼むから離してくれ」

「海、離れる。」

「んも〜。陸にいても空もこ・わ・い」

ああ、もうあり得ない…

「こらっ！何をしてるんだ、お前ら名前は」

陸上部顧問の上村先生が、怒鳴っている。おいおい、どーすんだよ、上村先生マジギレしてるよ…はあ

「遅れてしまって申し訳ありませんでした。僕は、1年Aクラスの渡瀬空といます。」

うんうん。さすが空、上村先生を静めたよ。あとは、海がちゃんとすれば…っておいっ

「陸にいの弟で空の双子の弟の渡瀬海です！空が起こしてくれたのに俺、二度寝しちゃった エヘッ」 エヘッじゃねーよエヘッじゃ  
！！

...

ああ、もう最悪だ...

### 3 入学式(1)(後書き)

まだまだボーイズラブちゅーところまできてません…  
誤字などがありましたら、どんどん送ってくださいね。

#### 4 その後

#### 4 その後

入学式は、まあ何とか無事に終わり、今は各クラスで学級活動中だ。

キーンコーンカーンコーン

ああ、やっと終わった。が、何か嫌な予感…

…バタバタバタ…

…ガラツ…!

「陸にい!」

案の定、そこには、海が…

ドカツ!!!

「いったー!空あ、頭痛いじゃん!よけいに馬鹿になったらどーすんの!もうっ!」

海が泣き目になってる。

うわあ、痛そう…

「海、大丈夫?空、やりすぎだよ?海も、廊下は走っちゃだめだよ!」

「…はい。ごめんなさい…!」

まあ2人とも反省してるし、いつか!

「あつ!俺、生徒会室行かなきゃいけないんだっ!ちょっとまっつててね。」

あー、なんか視線が痛いなあ…

兄ちゃんが出てっから、入り口で待っていると、3年の先輩の視線

が…まあ、兄ちゃんのクラスはスポーツクラスだから、女子が少ないからまだましだけど…

「…えつ、ねえ、ねえ！…わぁ！！」

突然、後ろからいわれた。

「えつと…あの？」

目の前にいる多分、先輩が俺を見上げてにこりと笑う。

「渡瀬くんの弟の、空君だよ？はじめまして。ぼく、生徒会の高内美緒。3年Aクラス。よろすくね。」

似てる。海みたいなタイプだ。

「あ、よろしくお願ひします高内先輩。あの、それで、俺になをか？」

「もう、空くん、美緒でいいよ。そんで、渡瀬くん知らない？」

「ああ。兄ちゃんなら、生徒会室に行きましたよ。」

そしたら、美緒先輩は、またまた満面の笑みで言った。

「空くんありがとね。あつそうだ、こんな所で立ってたら疲れるでしょ？一緒来る？」

#### 4 その後（後書き）

次回から、新キャラ続々登場です（\*^o^\*）

それはさておき、最近、彩紅羅は定期テストが終わったばっかで、ひましています…なので、土日じゃんじゃん書きまーす（\*^o^\*）

## 5 その後(2)

### 5 その後(2)

生徒会室は、中央校舎の二階の一番奥にある。スポーツクラスの3年の女子と楽しそうにじゃれてる海を引っ張り出して美緒先輩と生徒会室に向かっている。実を言うと、女子と楽しそうにじゃれてる海をみて、嫉妬しただけなんだけど…

俺は、海が好きだ。たまらなく好きだ。最初は叶わないとおもってた。男同士だし、それに、双子だから…でも、もうあきらめない。

10年前、俺が6歳のときだった。その日の夜は、雨が降っていて肌寒かった。隣には、お兄ちゃんと海が寝てて、俺はトイレに行くために部屋をでた。

?リビング、電気ついてる。もう3時なのに…俺はドアノブにとをかけた。だけど、を止めた。中から話し声が聞こえたんだ。

…?父さんと、母さん?

「…ねえ、あなた、私たちは真実をあの子達に話せる日が来るのかしら?」

「さあ。それは分からない。でも、私たちは、海の本当の親じゃない。その事をきちんと伝えないと、本当の親の真実と和良がむくわれない。あまりにもかわいそうじゃないか…」

えっ、海は本当の兄弟じゃないの…

その事を聞いたとき、ショックよりも、嬉しいっておもったんだ。  
俺は、海を愛してるから

「空？空？そおくら？」

ほら、俺の名前を呼ぶ海の声がこんなにも愛しいんだ。

「…あつ、ごめん」

「空くん、海くんついたよ。入って。」

…ガチャ

「失礼しまーす」

「あ、もう遅いよ、美緒。ちこくー。って、あれ？そ、らとかい？  
何でいんの？」

生徒会室は広くて、会議室みたいになってて、中には6人が椅子に  
座って、休憩中だった。

「あーっ！渡瀬兄弟だ！かけーなあ！」茶髪の先輩？らしき人が  
いう。

「ああ、ごめん。はじめまして。俺、生徒会会計で、2年Sクラ  
スの、大久保利輝<sup>としき</sup>つてんだ。よろしく。」

にこりと笑うその顔はとても整っていて、かなりの美形だ。

ガコッ！

「いったあゝ！なにするんっすかつ陸先輩！」

うわあ、痛そう…兄ちゃんのチョップ…

「やめてよ、利輝。空にちよっかいださないで！」

「もうっ！怖いよ先輩！あつ、でも海くんは心配しないんだね。」  
チラリと、横目で、すでに生徒会室にはいつて、生徒会の人達と仲良く話している海を見る。

「ああ。大丈夫だよ。海、もう馴染んでるし。それより、空、はいつて。」

生徒会室に入ると、会長の沖田先輩と、副会長の翔先輩、雅先輩、堅斗先輩が自己紹介をしてくれた。海はと言うと、利輝先輩と楽しそうにパズルしてるし…でも、何故、全員男…？  
それを見透かしたように、沖田先輩がいう。

「この学校は、もともと男子校で、女子がかなり少ないんだ。来年からは、隣の女子校に女子は移って、ここは男子校に戻るんだよ。まあ、明日からは、女子全員女子校に交流会でゆう形で行くから、男子しかないけどね。」

ああ。なるほど。まあ、俺は女子が苦手だからちよつどいい。

「終わったあー！じゃあ、皆、僕は仕事終わったからかえるね。空、海、帰ろ。」

その瞬間、海が兄ちゃんに引っ付く。ヤケル…

そのまま、仲良く帰路についた。明日からどいなることやら…

## 5 その後(2) (後書き)

注意 主人公は、あくまで陸です。

美緒先輩。彩紅羅のお気に入リデス。実は、後で大事なところに再登場します。他にも出ますけど…。

次回は、陸×海になる予定です。お楽しみ頂ければ嬉しいです(＊

^o^\*)

## 6 陸上部登場！& a m p・双子から…(1) (前書き)

久しぶりです。彩紅羅です(\*^o^\*)最近、うちの学校では、3年生を送る会があって、その実行委員になってしまった彩紅羅は大変です(\*^o^\*)

なので、更新が遅れるかもしれませんが。でも見捨てないでください  
〜( ) m

## 6 陸上部登場！& a m p・双子から…（1）

### 6 陸上部

…なんか、見られてる…てゆーか、海の隣に立ちたくない。僕が小さいのが目立つから…

「ホント、かわいかっこいいよなあ。海。陸には似ても似つかないし。なあ？陸？」

「もういいでしょ！孝治！早く海の紹介してよ！それに、なんで僕が海の隣に立たされてんの？他の1年生は？」

「あ、あ？お前は、自分等が説教されてんのわかってんのか？」

「…説教じゃなくて嫌がらせじゃん…」

「りく。何か言ったかな？」

「いえいえ。なんにも…」

僕と海は、今ま陸上部の部室にいる。陸上部キャプテンの三重孝治が、キレぎみで言ってる。そして、部員全員の前で海の紹介という名の説教をくらっていた。

「それと、他の1年は、お前らのくる1時間に時間どつりにきて、とつくの昔に紹介は終わってたんだよ。つーか、海さっきからどうした？いつものお馬鹿キャラはどうしたんだよ？」

ふと、海が口を開いた。

「すみません三重キャプテン。空が倒れたんです。それで、俺と陸にいで保健室に連れていったんです。まあ、心配で心配で… うわあ〜ん」

…おいおい、海よ。お前は幼稚園せいカ！

… 1時間前…

俺と陸にいと空は放課後、たわいもない会話をしながら玄関へと続く廊下を歩いてた。

「兄ちゃんと海は今から部活？」

「うん。俺の高校生初部活！楽しみだなあー。でも、空がいないとつままないー！！空あ〜陸上部はいれよあ〜」

「海。無茶言うな。」

「もつう〜空あ〜」

…海がうつつ向いて拗ねてる。あーあ。可愛い。

「こらこら！海拗ねちゃだめでしょ？高校生なんだから！それより早く行かないと孝治怒ると怖いんだから…」

「ううー。わかったよあ」

「じゃあ、空、また後で。ばいばい。」

「空あゝばいばい」

…空と別れて、玄関へ向かい歩き出したそのときだった。…

ドサッ

ふり返ると、そこに倒れる空。

「「空！…！」」

空の顔は真っ赤になってて、額に手を当てるととてつもなく熱かった。

「すごい熱…！」

俺はすぐに空を抱き抱え保健室へと運んだ。

それが、俺らを狂わす引き金だった …

6 陸上部登場！& a m p・双子から…(1) (後書き)

そろそろ、双子の過去、真実、そして、愛。ややこしくなるかもし  
れませんが…

7 双子から…(2) (前書き)

お久デス(^| ^)v

彩紅羅です。更新遅れて申し訳ありません…m( | | )mでわで  
わ本編へどうぞ(^w^)

## 7 双子から…(2)

7 双子から…(2)

空 side

「…んっ…」

目をさますと、俺はベッドの上で寝ていた。

「…頭痛い。ああ、俺倒れたんだっけ？」

…??何か腕の上に…

見てみると、海が俺の腕を枕にして寝ていた。まだ幼さの残る顔立ち。睫毛は長く、唇は紅く蓄のようだ。ああ。なんて可愛いんだろうか。

「…海？起きて？部活は？」

そっと海の肩を揺らしてみる。

「…んん？なあに？空兄ちゃん？ねれないの？」

…ああーヤバイ！空兄ちゃんと呼ばれるのは10年ぶりだ。

…昔は、空兄ちゃん、空兄ちゃんって言って俺の後ろをついてきたものだ。その時は、海の方が小さくて、俺が守ってた。なのに、いつの間にか俺よりデカクなって、陸上でも有名になってた。

「あっ！じゃあ、海が頭よしよししてあげる。」

そう言うと海は俺の頭をグシャグシャに掻き回し始めた。俺より少し大きい海の手が気持ち良くて俺は2回目の眠りについた。

海side

空の熱は38.6あった。昔から、空は我慢することが多かった。

…ガチャ

「海。保健室の先生今日はやすみでないらしいから、母さんが15分くらいで迎えに来るらしいから僕ちよっど行ってくるね。」

そういつて陸には、またもや行ってしまった。

空は肌が白く、そのせいで、

頬や首もとはほんのりと桜色に色ずいている。それがまた、色気がムンムンで、俺も、理性たもつのに一苦労だった。

息も荒く、軽く喘ぎ声が聞こえる。

「…んっ…。はあっふう…」

少しだけ開いた口から熱い息が漏れる。まるで、俺を誘ってるみたいだ。いや、誘ってる？無意識に、俺のことを誘ってるのか？

俺の頭ん中は、もうぐちゃぐちゃで、もう思考回路停止…ワケ分かんなくなってる。

「…んっ。か、い？海？」

「…っえ？空？」

空の手が何かを探すかのよつに宙をさ迷う。

「ああ。寝言か…」

そつと空の手をとる。すると、空は俺の手を握り返して無意識に俺の手を自分の頬にあてて、すりすりしだした。

！…！はっ？はあ？えっ！ちよっ、ヤバイって。

ブチッ

その瞬間、俺の理性という名の糸がブチ切れた。

「…んっ！あん？はあ、っっ…」

空の唇に深い深いキスを落とす。

「ふっ…やあ！かいっ！んんっ」

引っ込めようとする空の舌を絡めとる。

「… はあ、はあ、か、い？なんで？」

目が覚めてしまった空が俺を見上げて言う。

「…空、俺…お前のこと好きだ。空は嫌だよな。双子だし、男だし…。分かってる。でもな、好きで好きで仕方がないんだ…」

空を強く抱き締めながら言う。

… 心が軽くなった。答えは分かっている。きっと、“俺にちかずくな”とか“キモい”とか言われるんだろう。

「…っ、海、俺も、す、き。好きだよ。」

俺の予想とはまったく違う答えが返ってきた。

「お前は、自分の言っていることわかってんのか？俺はお前のこと恋愛対象としてみてるんだぞ…！」

あんまりにもビックリして、もう一度告白？のようなものをしてしまった。

すると、空は枕に顔を埋めて呟く。

「…ほ、んと。本当だよ。おれ、ずっと昔から海のこと、好きなんだ。…」

顔を真っ赤にして呟く空はいつものクールな感じとは違って可愛くて、まるで幼子のようだった。

と、ゆーわけで、遅れたんすよ！

「お前は、自分の言っていることわかってんのか？俺はお前のこと恋愛対象としてみてるんだぞ…！」

あんまりにもビックリして、もう一度告白？のようなものをしてしまった。

すると、空は枕に顔を埋めて呟く。

「…ほ、んと。本当だよ。おれ、ずっと昔から海のこと、好きなんだ。」

顔を真っ赤にして呟く空はいつものクールな感じとは違って可愛くて、まるで幼子のようなだった。

「と、ゆーわけで、遅れたんすよ！すみません」

部活が終わって家に帰る間、俺は空のかおが早く見たくて見たくてたまらなかったのだった。

## 7 双子から…(2) (後書き)

ついに!!!空と海おめでと¥(^ー^)/ですね。次回は陸上部メンバーがでできます。陸がメインになってます。イケメン新キヤラも登場します。感想どんどん送ってくださいね。

8 大会にて。新たな出会い… (1) (前書き)

お久しぶりデス!!

m 彩紅羅です (\*^o^\*) 更新遅れて申し訳ありません m ( (

## 8 大会にて。新たな出会い…(1)

8 大会にて。新たな出会い…(1)

… 灼熱の太陽に照らされ、レーンを光り輝かす。その匂いはいく  
ら時がたとうと僕の心に懐かしさをかもしだす。

男子100メートル決勝。この日最後の競技とあって、会場はざわ  
めき、そして少しだけ緊張のいどが張り巡らされていた。

「かいー！頑張れー」

今日は陸上部の大会で海は1年生ながら男子100メートル走に参  
加し決勝まで勝ち進んだ。

僕の呼び掛けに右手を軽くあげてヒラヒラとふる海はいつになく力  
ツコイイ。いつもはお馬鹿で頭ん中も冴えなくせに、陸上に関し  
ては一流で頭も冴えカツコよくて集中力も半端ない。そんなところ  
はやっぱ、僕に似てるんだろう。

海がスタートした。早い。流石だ。追い上げている。あと一人。あ  
っ！ー！

… ほぼ一緒にゴールした。

「… かいー！優勝おめでとー！」

「陸にいー！！やったよー。あんがとう。！！！！」

「… ああ。はじめてだ。陸にから抱きついてくるなんて。うれしくて泣きそう…」

「おい、あと30分でバス出るから遅れんなよー。」

大会が終わり、ざわめきが薄れていくなか、玄関入り口には孝治の少しかすれた声が響いていた。

海はバスの周りでインタビュートかを受けている。

僕は、静けさを取り戻した観客席へと歩いていった。

… コツン、コツン、コツン。

観客席へと登る階段は、僕の足音だけがひびく。そして、目の前に広がる広く美しい世界。夕日に染められ、紅く色づいている。ず

つと昔から、陸上を始めた時からこの光景が僕は一番好きだった。いや、この景色を見たいと想い、この中で包まれながら走りたいたい陸上を始めたと言っても嘘じゃないだろう。

ふと、右を見ると一人の青年が座っていた。髪は茶色く、肩には着かないが長めで、カッコイイ！ホストのような格好をしている。ホストか？だがその体は美しいほどにバランスがよく、筋肉質だが細身で締まっていてスポーツをかなりしてきてるように見える。

…あつ！目があった。

「……………」

「……………」

先に沈黙を破ったのは相手のほうだった。

「…おいつ、お前もしかして、渡瀬陸か？」

「…えっ？あ、はい。そうですけど。…あの？何処かで会ったことありましたっけ？」

相手は少し驚いたように目を見開き固まっている。

今日は天気もよくて、暇潰しに散歩でもしようと思っただけで部屋をでて、通りを歩くと、陸上競技場から歓声が聞こえた。その時、おもった。懐かしかった。

(…はつ。馬鹿だな俺も。天才と呼ばれた俺も落ちぶれたもんだ…)  
今はホストをしている。怪我で俺の選手生命はたたれ、何も考えられなくなっていたとき、声をかけてくれたのがオーナーだったんだ。今だって、陸上に未練が無いわけではない。だからなのか？俺の足は自然と歓声の中へと向かっていた。

鳥肌がたった。なんだこいつ。速い！！凄い。相手を寄せ付けられないその走り。それより、あの瞳。まっすぐに前だけを見つめ走る強気で力強い走り。こんなヤツを見たのは初めてだった。

…だから、会いたいと思った。渡瀬陸。そいつに。

…そして今、ソイツは俺の目の前にいる。気まぐれにきた大会で思いもよらぬ拾い物をした。決めていたんだ。ソイツが怪我で引退したと知ってから。コイツを復活させると。俺と同じ人生にさせない。



8 大会にて。新たな出会い…(1)(後書き)

謎の美青年登場！です。その正体とは！

感想などどんどん送ってくださいね。待ってます〇(^-^)  
〇

## 9 新たな出会い…(2)

9 新たな出会い…(2)

「…座れば？」

「あっ！はい。」

美青年の横に腰を下ろす。

…横顔も、カッコイイなあ…

「？…何？俺の顔になんかついてる？」

「…！いえっ！あの、それより、僕に何かご用ですか？」

相手は僕を知ってるみたいだけど…

「…ああ。俺は、神谷晋。ホストしてる。こっに見えても昔は陸上で有名だったんだぞ」

…！神谷晋？聞いたことがある。そうだ！伝説のスプリンター。その名は有名で、怪我で引退するまで世界的陸上選手だったんだ。でもまだ20代前半のはずだ。でもなんでそんな人が？…

「…知ってます。でもなんで？神谷さんが僕の事を？」

すると、神谷さんは自分の過去について語り出した。

「俺はさ、天才天才って騒がれてて。でも、ある大会でね、怪我をしたんだ。靱帯が切れて、足には後遺症がのこった。日常生活にはなんの支障もないんだ。でもね、走ると足が麻痺して、歩けなくなる。そんな風に途方に暮れてたとき、ふっと立ち寄った陸上大会でね、君をみたんだよ。陸。」

「えっ？僕を？」

「ああ。君は凄かった。身震いしたよ。君の走る姿を見て、俺は、お前になら陸上界を任せられると思った。だからこそ、キツパリ陸上を諦められた。まあ、未練が無いって言ったら嘘になるけどな…」

苦笑しながら呟く神谷さんは少し悲しそうな目をしてた。そして続ける。

「なのに、お前が怪我して、高1で引退したって聞いて、ショックだった。俺は、俺はお前をっ」

「やめてよっ！神谷さん、お願い。それ以上言わないで…。僕はもう走らないんだよ…。」

知らない間に僕は立ち上がって叫んだ。

「ああ。ごめんな。陸…」

「あつ、違うんだ、ごめんな神谷さん。心配してくれてたのに。でもね、僕大丈夫だよ。ありがとう。」

そういつて笑いかけてバスへと戻る。神谷さんは連絡先を教えられて、僕の良い相談相手となった。

## 9 新たな出会い…(2) (後書き)

晋はまだまだ諦めてません！これから陸を復活させるために奮闘します。次回は陸&amp;amp;優夜の熱い熱い恋物語…。新キャラ続々登場します(\*^o^\*)

10 陸&amp;mp・優夜。交流会にて…

10 陸&amp;mp・優夜。交流会にて…(1)

「陸!!!」

聞き慣れた声に振り向くと、そこには見慣れたヤツが満面の笑みで立っていた。

「陸! 会いたかったあ!」

急に抱きつかれて耳元で呟かれる。

…ああ、今、僕の顔真っ赤になってるだろうな…

今日は、紗輝山高校と一ノ瀬高校の交流会で、紗輝山高校に一ノ瀬高校の生徒会が来ることになってる。僕たち、紗輝山高校の生徒会メンバーで会議室に向かっている途中で、僕の幼馴染みで、親友で、昔のライバルで、そして僕の好きな人。桜智優夜とあったのだ。優夜は、一ノ瀬高校の生徒会長で、陸上でも、有名だ。

僕に抱きついてる優夜をみて、智輝と利輝はニヤついているし、他のメンバーは、口をポカンと開けている。でも、一人だけ、美緒は違った。

「！渡瀬くん！誰？この人！渡瀬くんにくつつかないでー！！」

…うわぁ、ビックリ！美緒があんなこと言うなんて…周りから変な目で見られないようにフォローしてくれてたのかなあ？

「お前こそ誰だよ！俺は陸の大親友で幼馴染みの桜智優夜だ！覚えとけ！」

「ふんっ！お前のことなんて誰が覚えてるかよー！べー」

いきなり優夜と美緒の喧嘩が始まった。

…？なんで？喧嘩する理由が分かんない。

二人が喧嘩してるうちに、会議室につき、会議は進められた。紗輝  
山高校と一ノ瀬高校の間に小さな火花が散っていたことは言うまで  
もない…

…ボタンッ

何？この空気…

交流会が終わって、皆が帰路についたころ、俺は陸と一緒にいた。

「…あつ、ヤベエ。会議室に忘れもんした。ごめん陸。ちよっ、取ってくるからまって…」

急いで会議室に戻る。ドアを開けると誰もいないはずの会議室に一人の少年が立っていた。

…確か、高内美緒。

「ねえ、桜智君？聞きたいたことがあるんだあ〜いい？」

軽い口調で言う。でも…。目が笑ってない。

「…？なに？俺に聞きたい事って？」

高内は俺の後ろで半開きになってるドアを閉めた。そして、そのまま俺越しに壁に手をつけて俺を見上げる。とつても睨んでる。身長差が15センチ以上もあるため、高内は背伸びもしている。

…あゝ高内、こんなことすんなよ！顔は可愛いんだからよ。もつたいたい！！

俺を見上げたまま上目遣いで少し首を傾けながら高内がボソリと呟く…

「アンタさあ、渡瀬くんのなに？」

「えっ？…」

突然の問いかけに自分でも困惑してるのが分かる。

「ぼく、渡瀬くんの事好きだから。アンタには渡さないから…。」  
いままでのほんわかしたオーラは微塵もなく、怒気だけが高内を取りまいていた。

ドアをあけ、会議室を出ていく高内をみながら、なんとも言えない気持ちになっていた…。

…俺だって渡さない。ずっと、大事にしてきたんだ…  
陸だけは譲らない…。

10 陸&a m p・優夜。交流会にて…（後書き）

陸&a m p・優夜。二人の想いは通じ会うのか。

次話急展開！美緒先輩の本性とは…

1 1 陸 & a m p ・優夜。交流会にて… (2)

1 1 陸 & a m p ・優夜。交流会にて… (2)

優夜が忘れ物を取りにいった、もう、15分ぐらいたつ。

「…優夜、迷ったのかなあ？」

優夜を迎えに行こうと会議室に向かう。

「…ワケ？…カラッ！」

会議室から声がする。

「優夜と…、奈緒？」

ドアを開けると、奈緒が優夜に寄り添っていた。(正面カラ見たためそうみえた)

「…えっ？…」

気がついたら自分の部屋にいた。両親は共働きで、空と海は友達の

家に泊まりにいつている。  
ドアを開けると廊下は静けさを持ち、僕一人取り残されたみたいだった。

…ピンポン、ピンポン、ピンポン

その時、家のチャイムが何回もなった。

ドアを開けると、優夜が今にも泣きそうな目で抱きついてきた。

「陸…！」

「…優夜。どうしたの？」

「…どうしたの？って、お前急に居なくなって、めっちゃ心配したんだぞ…！」

優夜は思いつきり僕を抱きしめた。

「…で、陸？何があったんだ？」

優夜が優しく頬をなでる。暖かい優夜の手だ。

「…っ、な、んでもない…。」

「…で？、なんで？じゃあ、何で泣いてるの？」

自分でも驚いて自分の頬に手を当てると涙で濡れていた…。

…グイツ!!

突然、優夜が僕の手を掴んで僕の部屋に連れていく。気がつくとなぐさぐさに押し倒されていた…。

「…陸。言つて。俺、なんかしたか？」

優夜が俺の耳元で呟く。

「…だって、だって、嫌なんだもん！美緒と優夜が仲良くするの嫌なんだもん！」

俺の視線を逸らすように横を向き陸が言う。  
目は赤く潤んでいて、。

…ヤバイ！可愛い！こんな陸を見て、俺の理性がもつ訳もなく…。

「…っ、ふあ、んん！はっ、ん、ゆ、やあ？ゆづやあ？」

陸にただ触れるだけの優しいキスをする。

酸素を求めて開いたすきを見逃さず、舌を滑り込ませる。奥へ奥へと逃げていく陸の舌を絡めとり、歯茎の裏をなぞると陸は身体を震わせながら甘い声を漏らす。

名残惜しく口を話すと陸と俺の間に透明な橋がかかり、飲み込めなかつた唾液が陸の頬を伝う。

「…あれは、抱き合ってたんじゃない。喧嘩して…。オ、レは、俺は陸が好きだよ？だから、信じてよ！そんな顔、しないで？ね、お願いだから…。」

優夜が陸を抱き締めながら言う。

「…ぼくも、だよ。」

顔を真っ赤にして陸がボソリと呟くけど、もっとハッキリ聞きたくてもう一度尋ねる。

「…なに？陸聞こえないよ。もっかい言って…。」

すると、陸は恥ずかしそうに顔を手で隠そうとする。それすらも許さないというように陸の手を取り、片方ずつシャツに押し当てる。

「…陸、言ってる？」

軽く陸の耳朵を甘噛みしながら尋ねる。陸は潤んだ目で俺を見ながら小さな声で、でもはつきりと言う。

「…好き。優夜が好きだよ…」

その姿があんまりにも可愛いくて、陸を抱きしめると首筋に顔を埋

める。ふわっ、と陸と石鹸のいい臭いがした。舌で鎖骨をなぞると、陸から甘い声が漏れる。

「…んっ、」

そこを強く吸つと陸の白くて綺麗な肌に真っ赤な花が咲く。

「…はぁっ、優夜…」

陸の温もりを感じると、気持ちがよくて、陸を強く抱きしめた。そこで俺の意識は途切れた…。

11 陸&amp;p・優夜。交流会にて…(2)(後書き)

お久しぶりです( ^ w ^ ) 更新遅れてすみません( | | ) m

陸と優夜!! やつと思いが通じ合いました。

次回は、切ない感じになっています。( 陸の過去編で、空、海、も  
久々に登場!! もち、優夜も。 )

誤字などがあつたら、すみせんがお知らせください。感想もどん  
どん送ってくださいね。

## 12 体育祭

12 体育祭

君が隣にいる。  
君が笑っている。

今はそれが幸せで…。

本当は許されない。

僕はもう、二度とあの場所には戻れない…。

優夜と僕が両思いになってから、3ヶ月がたった。今は10月で夏より涼しい。僕達は何一つ変わらない日々を過ごしてきた。あつ、でも1つだけ変わった事があつた。

「渡瀬くん…。す、好きなんだ…」

なんと、僕は美緒に告白されてしまった。ビックリしたけど、僕は、優夜がいる。だから、言ったんだ。

「ごめんね…。でも、ありがとう。」

そしたら、美緒は笑ってくれた。

話は戻り、今は生徒会室で体育祭の話し合いをしている。

体育祭も、女子とはバラバラにするそうだ。

今期から空と海が生徒会長補佐に加わって、今は楽しくやっている。生徒会は僕を除いてみんな美形で生徒達はキヤーキヤキ叫ぶ。小学校からほとんどがこの学校（男子ばかりの学校）で青春まっただなかで、欲を満たすにも、相手は男しかいないわけ…。この学校にはゲイ、バイが9割、ノーマルが1割の生徒がいる。まあ、なれたけどね。

「各クラスで、競技の振り分けをしていてください。」

会長の智輝が言って、会議は終わるって思っていた…。今日はこの後、優夜と約束してる。会議が終わり、真っ先に出ようとしたときだった。

「…陸！！まって、」

急に翔から呼び止められた。

「…んっ？なに？」

早く行きたくて、急かすように聞くと、翔は、バツが悪そうに呟く。  
「…今年は、走るのか？」

翔も陸上部で、なんだかんだで僕のこと心配してくれてた。でも…  
僕は、僕は…。

「…ううん。走らないよ。僕には走れない…。」

「…でも、最後の体育祭だろう？100メートル走ぐらい走ればどうだ？」

「…ありがとう。でも…はしれないんだ。ごめん。僕、約束あるから帰るね。」

そのまま部屋をでる。中にいる人たちは呆然とする人もいれば、うつ向いてる人もいる。廊下を歩きながら、目から熱いものが流れてくるのを抑える。手で押さえても、手の間から溢れでる。

…ああ。僕って本当に走んの好きなんだ…。

それでも、もう戻れない…。

あの場所を走ることにはできない。

もう戻れないんだ。

あの日を取り戻すことはできない。

ただ、祈ろう…

せめて、あなたたちが僕のようにならないように。

そして…

願っています。皆が笑顔でいられることを…

## 12 体育祭（後書き）

今回は、陸の思いが切実に書いてあります。走れるはずなのに、何故、陸は走らないのか…？

次回もよろしくお願いします（\*^o^\*）

### 13 体育祭(2)

#### 13 体育祭(2)

「晴れたね！空、海！」

今日は待ちに待った体育祭で、快晴だ。

…ああ、よかったあ。やっぱり昨日でてる坊主作ったからだね。これで、空の走る姿が見れる。

海は、早いのがわかってるけど、何と、空も早い。空は僕が引退するまで一緒に陸上をやった。空は勉強に専念するために辞めたって言うんだけど、本当は違う。きっと、僕のせいだ。空は優しいから。

パンパン！

「ただいまより、紗輝山高校体育祭を挙行いたします。」  
理事長の宣言で体育祭は始まり、競技も無事に進んでいった。午前の部もおわり、後はリレーを残すのみ。

「海！空！頑張つてね。」

海と空は僕と同じ赤組で、リレーの選手だ。このリレーは、この体育祭で一番のメインイベントで一番盛り上がる。海と空を見送り、僕は本部の席に戻った。

リレーが始まるまであと15分をきつたときだった。選手達は次々に選手入場門に集まっている。白、紅、蒼、黄、桃、と色とりどりの選手が少し緊張した様子で仲間と話している。

「渡瀬くん！」

名前を呼ばれて振り向くと、美緒が走ってくる。なにかあったのだろう？美緒は息が上がっている。

「……？どうしたの？美緒。何かあったの？」

「どうしよう……。赤組のリレーの選手が一人倒れた。規則であと一人は三年生ど50メートル七秒以内で走れる人が必要なんだ。他に誰もいないし、もし棄権したら、大事になるよ。日本の陸上協会の人も来てるし赤組はどうしても棄権させられない、だからね、渡瀬くん。走って。アンカー走ってよ。知ってる？桜智君、来てるよ？それに、きつと皆まつてる。渡瀬陸がもう一度走ることを。走るん

だよ!!!あの日の自分を取り戻すんだよ!!!」

美緒は僕の肩を掴み揺さぶりながら、涙を流しながら叫ぶ。

そうかぁ。美緒もいたんだ。僕が一回だけ人前で涙を流した場所に。あの日、僕泣いたのを知っているのは優夜と美緒と翔と智輝と海と空だけだ。

「…わかった。は、しるよ、走るよ。だから、美緒泣かないで…」

### 13 体育祭(2) (後書き)

こんにちわ(\*^o^\*) 彩紅羅です。突然ですが、皆さんの家の近所では桜の花は咲きましたか？彩紅羅の家の近くの公園は、満開で夜はライトアップされてとても綺麗なんです!!!

話がズレマシタが、今回は、“陸、復活”です。神谷も登場しますよ(^w^)

感想、誤字、また評価などは是非お送りください(^|^(v)待ってます…

## 14 奇跡の瞬間

### 14 奇跡の瞬間

リレー選手の待機場所を見て、誰もが目を見開き、そして涙を流している。各組の選手名が紹介されていき、そして…。

「赤組、アンカーは3年S組…渡瀬、陸…。」

その名がコールされた瞬間、全校生徒だけでなく、保護者や来賓、観客からも大きな大きな声援が送られた。この瞬間を誰もが信じ、待っていたのだ…。

ハチマキを結び直し本部から待機場所へ行こうとしたとき、後ろから声をかけられた。

「…晋さん、なんでいるの…?」

そこには、晋さんこと神谷晋が立っていた。

「もしかしたら、お前が走るんじゃないかと思って、来てみたんだ。走んの、急に決まったんだろう?大丈夫か?」

晋さんは優しく僕の頭を撫でてくれた。

本当は、すっごく緊張してて、怖かった…。

( ははっ、晋さんにはお見通しか… )

「晋さん…、僕ね、大丈夫だよ。頑張る！」

笑って言うと、晋さんは僕を抱きしめて、言った。

「陸。大丈夫だからな。俺みたいにならないように、頑張るんだ…。俺は、もう二度と走れない…。でも、お前はまだ間に合うんだ。俺の分まで走ってくれっ！陸。」

晋さんの目から一筋の涙が伝う。

ああ、

綺麗だ…。

生まれて初めて人の涙を美しいと思った。

晋さんが流す涙が、

まるで…。

まるで真珠のように…

まるで宝石のように…

とても、あまりにも綺麗だったから…

本当に大切なものを思っ流す涙が…

こんなにも美しいなんて思いもしなかったから…。

「晋さん…。」沈黙を破ったのは陸だった。

「…僕、頑張る。もう怖いものなんか何にも無いもんね」

「…ありがとう。陸。行ってこい！」

こんな僕に《ありがとう》って言える晋さんは、本当に大人で、強い人何だと思った。

各組の選手紹介が終わり、最後の種目と言うことで熱気だっている生徒たち。赤組のリレーメンバーは、最後に気合いをいれるため、

円陣を組もつと集まる。

「…赤組！ファイト」

「「「オオ」「」」

気合いをいれ、各場所に帰る途中、海と空が《大丈夫？》と聞いてきたが、僕は、笑って《大丈夫。ありがとう》って言うことができた。その時、海がなんか紙を渡してきた。アンカーの待機場所について紙を開くと、そこには、規則正しい整った字がならんでいた。

『陸。頑張れよ！』

俺は、陸が走ってんの見るのが、一番好きだよ。

優夜 『

それは、優夜からの手紙で、応援席を見ると、そこには優夜がいて、目が合うとニコリと微笑んでくれた。

（ノノヤバイよお、僕の顔、絶対真っ赤だ…。優夜カッコよすぎ…。）

「それでは、選手の皆さんは位置についてください。」

始まりのアナウンスになる。

たあ。

始まる。

復活の時が…

今、舞い戻れ

龍のように駆けるその心よ…

前をただみすえる、その美しい瞳よ…。

## 15 奇跡の瞬間(2)

15 奇跡の瞬間(2)

「ヨーイ、パンツ！」

リレーが始まった。周りは、選手を応援する声でざわついている。赤組は、三番手でバトンが渡った。青に追い付きそうだった。

青とおんなじ二番手で空にバトンが渡った。

速い。流石だ。どんどん追い上げてる。

スゲー…。

緑に追いついて、海にバトンが渡った。やっぱり、空と海の息はピッタシで、いとも鮮やかに海の手へ渡っている。緑は、孝治だ。ヤバイなあ。孝治は、海に負けないくらい速いんだ…。

予想どおりに、海と孝治は接戦だ。

そして…

僕の手へ、バトンが渡る。アンカーだから、校庭一周。応援席は静まりかえり、聞こえるのは、僕の足音。

ああ、気持ちいい…。

その踏み締める度に感じる土の重み。それが余りにも気持ち良くて、

懐かしくて、知らぬ間に、僕の間からは涙が溢れでている。

ぼやけた視線の先には緑の八チマキが見える。翔だ…。やっぱり、速い。

でも…

抜きたい。

思いつきり、土の感触を確かめるように走る。よし、抜ける…。

白のテープに飛び込む。

その瞬間、時間が止まったかのように、校庭は静まりかえった。そして、その場にいた誰もが涙を流した…。

陸のその美しい澄んだ心に…。

そのガラスのような涙に…。

そして心を奪われた…。

陸の走りがあまりにも美しかったから…。

陸の走ってるときのあの幸せそうな笑顔があまりにも綺麗だったか

ら…。

そして、誰もが祈った。

彼が、二度とこの笑顔をなくさないように…。

そして…

「…う、そ 一位？」

目の前には《一位、赤組》の表示。

陸はその場に膝から崩れ落ち、天を仰ぎ泣いた。

その回りに海、空、優夜、晋、孝治、美緒、翔が歩みより…

そのとき、皆の心は一つだった。《陸がもう一度走ること》それは、皆の願いだったから…。

晋は思った。走ることはこんなにも美しいものなんだ…。

美緒は知った。自分が見て見たかった彼の本当の笑顔を。

翔は笑った。彼と走ることの楽しさに…。

孝治は安心した。彼はもう、大丈夫だろうと。

空は微笑んだ。心がとても軽くなったから…。

海は今日の空を仰いだ。その空があまりにも綺麗だったから。

そして

陸は泣いた。皆との思い出、海、空との日々、優夜の優しい温もり、  
走ることの嬉しさを取り戻したから…。

## 15 奇跡の瞬間(2) (後書き)

お久しぶりです。彩紅羅です。陸、やっと走れました:(泣)  
次回からは、海&amp;空、陸&amp;優夜、そして、陸の幼  
馴染&amp;陸の幼馴染みの恋人の話になります。新キャラ登  
場します(\*^o^\*)感想、送ってくださいね。

16 すき

16 すき

まっすぐにのびる、いちよの並木道。夕日に照らされて、木々が夕焼けに染まる。「…陸？」

「何？優夜？」

体育祭の帰り、一人暮らしの優夜の家へと向かっていた。

「よかったな。もう、大丈夫だ。」

「…うん。もう、大丈夫。大丈夫。」

優夜がそっと陸の手を握る。二人の影は重なりあいながらこうこうとのびていた。

「陸、何か飲みモン持ってくるな」

優夜は、一人暮らしで、何回か遊びに来たことがある。でも、付き合ってから、初めてだ。

(いつ見ても優夜っぽい部屋だよなあ。)

優夜の部屋は、必要最低限の家具とかしか置いてない。だけど、優夜の匂いがして、安心する。

優夜が戻ってきて、冷たいウーロン茶をくれた。

うまああ！

そのまま、たわいもない話をした。

「でさあ、智輝が…ッて、ちよつ優夜！！」

ソファーに座っていた僕に、優夜が覆い被さる。ふいに、生暖かいものが陸の唇を覆った。

「…ん、ふああ、ゆ、やあ？」

キスはさらに深く深くなっていく。

「りく。」

名前を呼びながら軽く舌を吸うと可愛く陸が鳴いてくれる。

「ゆ、や。はん、す、き好き」ギユツと陸が優夜の背に抱きつく。

その突然の告白に、優夜は身体を奮わせた。「…ねえ、陸、していい？俺もうもたない…」

陸の耳元でそつと吐く。ピチャピチャと耳を舐めると、陸は顔を真っ赤にして、小さく呟く。

「…ッ、いいよ。でも優しくして？」

その言葉に、優夜の理性はブチ切れた。そして…。

ブラック優夜降臨！！！！

「…ん、」

ゆっくりとシャツのボタンがはずされていく。シャツをはだけさせると、真っ白でキメの細かいキレイな肌が現れる。優夜は陸の首筋に顔を埋めた。

「…っふ、やだ、優夜」

キスマークを一つつけるたびに陸の身体が跳ねる。

「…りく、首弱いんだね…」

わざとらしく言ってみると、なんとも可愛らしい反応。

「…ちがつ、やだあ」

「…ふっやだじゃないでしょ？ここも、可愛く勃ってるし…」  
ピン、と陸の乳首をはねる。

「…ふあああ、や、やめっ、」  
頭をイヤイヤするようによこにふる。でも優夜は更に陸を追い詰めていく。

「…ホントに可愛い」

乳首を摘まんだり押ししたりすると、さらに、部屋に陸の嬌声がひび

く。そして、陸が膝を擦り合わせてもじもじしてるのを、優夜が見逃すはずが無かった。

「ねえ、陸、ここも触って欲しい？」

問いながらズボン越しに陸のモノをなぞる。

「…や、はあダメ、ふ、」

「…ホントに？」

わざと手を放す。

「…ヤッ、優夜イジワル…」

「…じゃあ、お願いしなよ。それまではなんもしないよ。」

優夜がにんまりと笑う。

「…って、／＼／＼／」

「ん？なに？きこえない」

「…うう、さわって、優夜お願い…」

まあ、いいか。

りくのものを取り出しゆるゆるとつく。

ジュル、ジュル、白い液が溢れ出す。

「…ふあ、優夜、も、でる、ン、」

「いいよ。イッて。」

「あああああ  
」

陸が熱を吐き出す。そして、そのまま意識を手放した。  
。

17 朝

17 朝

チュンチュン…

カーテンが風に踊っている。朝の風が窓の隙間から入ってきて気持ちがいい。朝日が顔を照らす。

朝日が照らす部屋のシングルベッドの上には、抱き合いながら穏やかに眠る二人がいた。

目が覚めると、隣には優夜の顔があった。

(優夜の顔、綺麗だなあ…。)

「りーく。何？俺に見とれてたの？」

気付いたら、優夜の堅い胸板に顔を埋めて強く抱き締められていた。

「…！優夜、なんで？いつから起きて…／／／／」

「うん？陸が起きるずっと前から。寝顔、可愛かったよ、りく」

ニヤニヤと笑いながら優夜は陸の頭を撫でる。陸は顔を真っ赤にし

て恥ずかしそうに口を開いた。

「うう／＼／＼バカ優夜…。」

涙目になりながら上目遣いでゆづやを見る。

バカと言いながらもギュッと抱きしめる。

そんな、陸の可愛い行動に、優夜はビックリしながらも、嬉しそうにだきしめる。

そして、陸の耳元で優しく呟く。

「陸、おはよ。」

優しく、大事なものを扱うように陸を抱きしめる。

その言葉を聞いて、陸も頭を上げ優夜をみる。

「おはよう。優夜。」

陸も、優夜と同じように目を細めて照れくさそうに笑った。

今日のこの朝から、また新しい日々が始まる。皆で過ごす幸福の日々が。

これから先、また、同じことが起こるかもしれない。それでも、皆となら、乗り越えて行ける。

そして…

これから君と進む先には、沢山の道があるけど、君と一緒になら、正しい道に進める気がする…。。

## 17 朝（後書き）

お久しぶりです（＾|＾）v彩紅羅です。次は空&amp;海のお話です。近々、晋さんの過去話も書く予定です。更新が遅いですが、皆さんどうぞよろしくお願い致します）（

18 海& a m p・空

18 海& a m p・空

体育祭が終わり、空と海は二人で家路につく。  
母さん達はほかの保護者と飲み会らしい。

「…海、飯出前でいいか？」

「あー、うん。俺カツ丼な」

家について晩御飯食べて久しぶりに二人っきりでまったりすごしていた。

「…なあーそら」

ソファーに空が腰かけてると、突然海が後ろから抱き締めてきた。

「…な、に？海…」

空は顔を真っ赤に染めてる。

「んー。今ごろさ陸にいたちいちゃついてんだろーだからさっ!」

「…だ、から?」

「俺らも。な?」

そう言っつて空に口付ける。

「…ふぁ、んん、やぁ」

最初は抵抗していた空もキスをするたんびに自らも舌を絡めてくる。

瞼の涙を舌で掬い取り、首筋へキスをする。

「んぁ、は、う」

首筋がとても弱い空は顔を真っ赤にしやがら喘ぐ。

スルリとシャツの中に手を滑り込ませ、撫でまわる。

胸の小さな突起をかくく引っ搔くと、空の身体がビクッと跳ねあえかな声が漏れる。

「…あう、ヤダ、んん、」

「ヤダじゃなくて、いいだろ？」

「…ヤッ、ちがう、ふぁ」

顔を両手で隠しながらイヤイヤと顔を横に降る。  
その手を引き剥がし頭の横に押さえつける。

「…へえ、こっ、こんななってるけど？」

ギョツと空自身を取り出して握りこむ。ゆるゆると衝き、先端に引っ掻くと、空はすぐにイッタ。

「…ふぁぁぁぁ」

「ヤバ、我慢デキねえ。指入れるよ？いい？」

耳元で吐くと、空は顔をそむけうん。と呟いた。

「…入れるよ」

ローションをたらし、蕾へと指をいれる。

「…ふ、や、気持ち悪い」

初めてだから、かなりキツイ。

「…つと、二二から辺か？」

…  
グイッ

「…んああ、なにへんになる、やあ」

前立腺を押し上げると海にしがみついて喘ぐ。

すぐに、そこは解かれ、もう、指3本がはいつてた。

「ごめん、も、無理。力抜いてて…」

一気に海自身を空へと貫く。

「…ふあ、んあはう、ふうう、」

「…も、イキン、」

「…いつしよ、イコ？海、う、いつしよ、ね？」

一気に突くスピードをあげ突き上げる。

「…ああアアア」

「…くっ」

空がイクと同時に海も空の中へと欲望を放った。

## 最終話

## 再出発〜未来へ〜

再出発〜未来へ〜

次の日、朝に全校集会が行われた。

「…では、次に産休に入った新井先生の代わりに来た新しい保険医の紹介をします。神谷先生どうぞ。」

「神谷晋です。よろしく。」

そこには、まぎれもなく、あの晋さんが立っていた。

「神谷先生には、陸上部の特別指導員になってもらいます。」

僕と空、海、奈緒は椅子からたちあがる。

「…晋さん、なんで？」

「渡瀬陸、お前は陸上特待生とし、県選抜メンバーへ任命された。」

「…う、そ、なんで…？」

「…体育祭、県選抜の監督が見てて推薦したらしい。陸、がんばれ。お前なら上へいける。世界の頂点を目指すんだ。どうする？陸？お前次第だ。」

「僕は、…」

沸き上がる大歓声のなか、僕は、スタート地点にたっている。オリ  
ンピック男子100メートル決勝。

やっとここまでできた。

沢山の困難があった。

1度は諦めた道だった。

でも、沢山の人に支えられてここまでこれたんだ。

「位置について」

監督席から晋さんの声が聞こえる。

「よーい」

優夜の優しい顔が浮かぶ。

「パンツ！」

走り出す。

10m、空の優しい顔が浮かぶ。

20m、海の子供っぽい顔が浮かぶ。

30m、晋さんのまつすくな瞳が浮かぶ。

40m、みんなの顔が浮かぶ。

50m、絶望にうちひしがれていたあの日の自分が浮かぶ。

60m、体育祭の日の自分が浮かぶ。

70m、優夜と初めて結ばれた瞬間が思い出される。

80m、今までの思いがこみあげてくる。

90m、涙でゴールテープが霞む。

そりて、

ゴール、愛しい、優夜の顔が浮かぶ。

ゴールテープをきり、掲示板に見えたもの、

1位 J A P A N S h i n W a t a s e

そして今、胸元に光る金のメダル。

沢山の人と抱き合いながら、

見えたもの。

それは、愛しい人と、

明るい光

希望の未来

## 最終話

## 再出発〜未来へ〜（後書き）

今まで本当にありがとうございました。更新が遅くなることばかりで迷惑もおかけしたとおもいます。また、いつか他のお話で会えることを願っています。

彩紅羅

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n2063g/>

---

願い・祈り

2010年10月21日01時35分発行